

【書評】

服部一秀著『現代ドイツ社会系教科課程改革研究
—社会科の境界画定—』

(風間書房, 2009年) 12,500円

梅津正美
(鳴門教育大学)

本書は、服部一秀氏が2006年に広島大学に提出された学位論文を公刊されたものである。服部氏の研究目的は、社会科の本質と教育原理を解明することを通して、社会科の境界を確定することである。この目的を、1980年代から1990年代のドイツ諸州の前期中等社会系教科課程の理論分析を通じて達成することをめざされた。

服部氏の立論の前提は、社会形成科の教科論に依拠することである。こうした立場から、氏が用いる主な研究方法は、社会秩序の維持・変更に係わる政治的判断の形成論を教科課程編成の事実に即して分析することである。

本書は、以下の章から構成されている。

序章 本研究の意義と方法

第1章 現代ドイツにおける前期中等社会系教科課程改革の課題と方法

第2章 国家適応教育としての無批判的政治的判断教化—権力化—

第3章 社会認識教育としての間接的な批判的政治的判断形成—社会科学化—

第4章 社会形成教育としての直接的な批判的政治的判断形成—公共圏化—

第5章 現代ドイツ社会系教科課程改革の論理と構造—脱権力化—

終章 社会科の境界画定—批判的政治的判断形成としての本質規定の妥当性

結論は、次のように導かれる。①分析対象の社会系教科課程は、三系統六類型でつかむことができる。第一系統の無批判的政治的判断教化は、国家適応教育(類型1)によりなされる。第二系統の間接的な批判的政治的判断形成は、教科学習の社会科学化をめざす社会認識教育が担い、それは社会存在認識教育(類型2)と社会形成認識教育

(類型3)の二つの類型に分かれる。第三系統の直接的な批判的政治的判断形成は、教科学習の公共圏化をめざす社会形成教育が遂行し、それは社会争論吟味教育(類型4)と社会対論形成教育(類型5)及び社会代案形成教育(類型6)の三つの類型に分類できる。②社会科は、批判的政治的判断形成の教科であり、それが社会科の境界を画定する。③社会科は、類型2から類型6にいくほど教科としての教育力が大きくなっていく。

評者は、本書の意義を、次の2点でつかんだ。第1に、社会形成科の教育原理を深化・発展させたことである。社会形成をめぐる議論の分析を原理とする類型4、社会形成のための議論の分析と個として判断を原理とする類型5、社会形成のための議論を通じた公共的判断を原理とする類型6が、段階的な類型として示されたことにより、社会科学科と社会形成科との位置関係や社会問題科における教育原理の位相が明確になったといえる。第2に、中学校社会科の教科構造を考える際に、教科論と結んでいくつかのバリエーションを示したことである。特に、社会形成科を基盤にした場合、トゥールミン図式を枠組みにして地歴公並行関連課程(類型4)や、地歴公分化—統合併置課程(類型5)、地歴公統合課程(類型6)を組織できる可能性を示したことは、日本の中学校社会科の変革に実質的な示唆を与えるものである。

評者自身は、社会認識教育としての社会科の強化を主張する立場から、社会形成教育は、類型4から6に進むほど、授業レベルでは議論の構成それ自体が目的化して方法主義の社会科になっていくのではないかとの危惧の念も抱いている。本書が提起する理論の有効性が、今後の授業実践の蓄積により検証されることを期待するものである。